

《川島 実》氏

「これが私の歩く道」

京大医学部生のプロボクサー

僕は京都大学出身の両親から生まれて、子どもの頃は「命の次に勉強が大事」と言われてしゃかりきに勉強しました。奈良の東大寺学園に進んだ後、京都大学の理学部で動物の研究のようなことがしたかったのですが、親や学校の先生から「もったいないから医学部へ行け」と言われて、医学部に入りました。

入学後は体を鍛えようと思ってボクシング部に入り、4年生の春のリーグ戦では全勝優勝も経験しました。ちゃんとお医者さんになろうと思わないまま6年生になった僕は、同級生が小児科に行くとか内科に行くといった話をしているときに、プロボクサーになりました。受けを狙ったわけではないですが、京都では話題になりました。デビュー戦は勝てませんでしたが、全日本新人王のトーナメントで決勝まで行きました。

連勝している勢いで結婚したり子どももできたりして、かなり充実していたのですが、プロボクサーといっても多い年で年収100万円程でした。収入が少ないので、プロボクサーというのは日中働いて、夕方仕事が終わってからジムに来て練習しているというのが一般的でした。僕は自分の子どもを授かった時に、

日中働いて夜ボクシングしたら子どもをみるときがないなと思い、薬剤師の妻に日中働いてもらって、彼女が帰宅してからジムに行くといったような暮らしをしていました。29歳で1ラウンドKO負けするまで、5年くらいプロでやりました。

自給自足農家から医者へ

プロボクサー引退後は、和歌山の串本町で稲作を始めることにしました。当時、一番上の子がアトピー性皮膚炎で、水や空気がきれいなところでいいものを食べたらよくなるのではないかと考えて、自給自足を目指しました。初めの年は結構豊作で、1トン程獲れました。これは結構やっていけるのではないかと考えて、高い米でもスーパーで買うと10キロ5,000円くらいです。1トンで50万円。僕の年収は50万円だったのです。1年で農業の厳しさにぶち当たりました。

そこで、「自分には医師免許があるじゃないか」と思いました。僻地で医者を探し始めると引く手あまたで、老人ホームの嘱託医と精神病院などかけ持ちでアルバイトしながら仕事を覚えていこうと思っていました。でも、1年くらいするとやはり苦しくなってきた、そんな時、京都の漢方の大家といわれる先生から声がかかり、京都で1年勉強して、何となく漢方っぽい診療ができるようになりました。しかし、レントゲンや心電図を見てもわからず、この世界で生きていくには脈とか陰陽とか言っていたらだめな気がしていた頃にボクシング部の先輩が連絡をくれて、今度は沖縄の徳洲会病院という救急車が数珠つなぎで入ってくるような病院に移りました。

そこでちゃんと聴診器とかレントゲンとか使えるような医者へ育ててもらいましたが、忙しくて家に帰れませんでした。徳洲会というのは全国にあり、山形県庄内の病院の先生に「うちでやらないか」と誘われたのを思い出して、そちらに移してもらいました。山形の病院に来たら、平日はたくさん医療の勉強ができて、土日は家で帰れるという恵まれた暮らしになりました。

災害医療チーム参加から患者中心の地域医療へ

山形に行って3年目の終わりに東日本大震災が起こりました。僕らの病院からも交代で医療ボランティアに行きました。最初は軽い気持ちで行ったようなところもあったと思いますが、行ってみると360度瓦礫で、町中に何かが腐ったにおいが立ちこめていました。自分の足で降り立った時にものすごいショックを受けてしまって、これは何とかしないとだめだと思いました。常勤医ゼロの気仙沼の病院で半年ボランティアをして、その後院長になりました。そこで3年程べったり地域医療、在宅診療中心の医療を組み立てて、始めた時は1万人の町で医師が私1人という状態でしたが、3年経って5、6人に増え、日本中から研修医が来たり、学生が見学に来たりするような病院に育ちました。

奈良に帰り僧侶に ～導かれて生きる～

そんな中で、奈良の親父が倒れました。親父の病状がどんどん進んで、来年の夏までもたないと聞き、よそのおじいちゃん、おばあちゃんばかり看取っていないで、自分の親父を看取ろうと思って、奈良に帰ってきました。

帰ってくる直前に、一緒に働いていた介護のスタッフから「先生、お父さんに『ありがとう』と言いましたか」と訊かれて、「いや、言うわけじゃないか」と答えました。その彼女は頑として「ありがとうと言ってください」と言うので、僕は帰って親父にとりあえず「ありがとう」と言いました。それを聞いた親父は何ともいえない嬉しそうな顔をしました。「ありがとう」と伝えてから2週間後、本当にそのことで最後の突っかい棒が取れてしまったのではないかと思うくらい、ふにゃっと亡くなりました。

それでお坊さんになったというわけではありません。東大寺学園の先輩が東大寺で偉いお坊さんになっていますが、僕が東北で働いているときに、彼が東大寺学園の生徒を連れて被災地にボランティアに何度も来ていました。その先輩からお坊さんにならないかと言われたのです。スカウトされてお坊さんになる人はなかなかいないと思います。今から思えば、もともと東大寺学園に進学したのも、こんな時代に医療の仕事をしているのも、親父が倒れて奈良に帰ったのも、大仏様のお導きなのかなと思ったりしています。

僕は今、10数カ所の病院でアルバイトしていますが、日本中で地域医療ってこんなにおもしろいものだよと語って歩いて仲間を集めています。僕の同級生は難しい病気の研究に進んでいった者が多いですが、僕は地域をおもしろくするほうで世の中に貢献できたらいいかなと思いつつ、お坊さんとしての活動もしています。